創立70周年を迎えた
豊田理化学研究所

10年前の2000年、豊田理研が行っている物性談話会（名古屋大学工学部　応用物理教室）と分子科学フォーラム（分子科学研究所（岡崎市在））で60周年を記念して特別例会を開催した。その分子科学フォーラムで豊田章一郎理事長は、豊田理研創立の精神である「自らの手で創り出す」研究の真髄を、「匠の心」を主題とし「ものづくりの道」を副題として語られた。それは、9月20日であった。

それから10年、間もなく豊田理化学研究所は創立70周年を迎える。この70年は日本発展の歴史であると共に、戦乱による壊滅的打撃を受けた酷い体験をした時代でもあった。

そしていま、不死鳥の如く再起しつつある研究所の力の根幹には、二つの原因があると考えている。

その一つは、研究所創設までに蓄積した知的ポテンシャルを、財団法人の中で125しかない「研究を行う法人」と云う確固たる基盤を持った組織として発足されたことである。その二つ目は、全滅に近い迄破壊された研究環境の中で「研究者の自由な意志を尊重し、人物主意の研究をする」とした創立の理想を失うことなく、非常に困難だった基本財産の護られたことである。これによって「自らの研究」を継続しつつ、学術奨励事業を50年以上に亘って継続して来られた理事長を中心とした執行部の英断と努力に心からの敬意を抱いている。

豊田理化学研究所は、この英断と努力によって、1963年（昭和38年）研究嘱託制度を開始、更に1969年（昭和44年）奨励研究員制度を発足させた。そして2004年（平成16年）から「自らの手で研究を行う」新事業“豊田理研フェロー”を創設し、既に7人の修了者を送り出し、現在9人の理研フェローが活躍している。

科学・技術の進歩は、研究経費の巨大化に向けて動いている。その中にあって、理研創立の精神である「自らの手に汗して、ものを創 り出す」研究者・技術者を、一業成ったシニアの人材の中に求め、規模は小さくても、尊敬される研究所をめざすことは、今迄70年、財団維持発展に努力を重ねつづけて下さった財団関係者に報いる道と考えている。

尊敬される研究所になるには、まず愛される研究所から、信頼される研究所に、そして尊敬される研究所に到ると考えている。

その内容は、研究所の全ての構成員が、自他共に認める一業を持って構成することと思っている。それは決して研究だけではない。“技術”も“運営”も同様である。私はそれを三本足の器“鼎(かなえ)”にあてはめている。三本の足が正しく調和して初めて、研究所は独自の道をつくり、信頼を得つつ社会に尊敬の念をもって受入れられるのではあるまいか。

かくして次の10年を踏み出す日を迎えることとなった。

財団法人豊田理化学研究所　所長
井 口 洋 夫